

イヌドウナの播種養成2年株利用による促成栽培技術

田口多喜子・檜森靖則・林 浩之

(秋田県農林水産技術センター農業試験場)

Forcing Culture of *Cacalia hastata* L. var. *Tanakae* (Fr. et Sav) Kitam.

Using Two-year Cultivated stock

Takiko TAGUCHI, Yasunori HIMORI and Hiroyuki HAYASHI

(Agricultural Experiment Station Akita Prefectural Agriculture, Forestry and Fisheries Research Center)

1 はじめに

秋田県では、冬期農業のひとつとして山菜の促成栽培が行われているが、実需者側からは、山菜のメニュー拡大と安定出荷が望まれている。イヌドウナは、北海道、東北から中部地方に分布するキク科の多年草で、秋田では「ホンナ」と呼び5、6月頃伸びた若芽を食用とする。これまで山採り根株を用いた促成栽培が行われていたが生産が不安定である。そこで、播種から2年養成した根株（以下養成2年株とする）を用い、2月初旬から収穫開始ができる促成栽培技術を開発したので報告する。

2 試験方法

- (1) 試験年次：2000～2003年
- (2) 実施場所：育苗及び本畑期；秋田農試露地圃場、促成栽培；硬質プラスチックハウス165平方メートル（普通非アロフェン質黒ボク土）
- (3) 試験内容

試験1：根株重別収量（2002年）	
試験区	備考
根株重(g)	
20～49	養成2年株
50～100	
100～199	株分け養成1年株
200～299	

播種養成2年株及び株分け養成1年株を、11月20日掘り取り、12月27日伏せ込み、同日加温開始（地中加温）。
試験2：播種養成株の肥大状況の把握（2002・2003年）播種から養成1年目、2年目及び3年目の秋に掘り取り、根株の肥大状況を調査。
試験3：養成3年株の加温方式と根株重別収量（2003年）12月4日掘り取り、12月22日伏せ込み、同日加温開始。

加温は①地中加温；床土内配線・地温管理、②空中加温；トンネル内空中配線・気温管理（写真1）の2つの方法で実施。収穫の目安は草丈10cm以上とし、長さ10cmに調製（写真2）。

3 試験結果及び考察

- (1) 促成栽培では、11月中旬までに親株から採種し、セルトレイ播種後、屋外で越冬させる。3月中旬に加温ハウスに入室して発芽させ、5月中旬の定植まで管理する。この株を翌年秋まで2年間養成し、11月下旬～12月上旬に掘り取り、12月下旬に伏せ込み、トンネル内を20℃で空中加温することにより、2月上旬から3月に収穫できる作型を開発した（図1）。
- (2) 試験1・2の結果から、本作型に用いる根株は、根株重20～100gが適し、平方メートル当たり2kgの収量が得られた（図2）。根株重150gまでは、重いほど株当たり収穫本数が多いが、伏せ込み密度が低くなることから、平方メートル当たり収量は低下する傾向があった（データ略）。
- (3) 2年養成した根株では、栽培に供することのできる根株重20g以上の割合が90%得られた（図3）。
- (4) 空中加温は、地中加温に比べ、平均地温で3.4℃低いが、平均気温で6.6℃高く推移するため萌芽が早まり、2月の収量も増加した（図4・5）。

4 まとめ

イヌドウナ（ホンナ）の促成栽培は、播種から2年養成した根株を用い、12月下旬に伏せ込むことで、2月初旬から収穫が開始できた。用いる根株は、株重20～100gが適し、収量も安定した。トンネル内の加温方法を、空中加温

方式とすると、地中加温に比べ平均気温が高く推移することから、萌芽が早まり、2月中の収量及び全収量が高まることが確認できた。

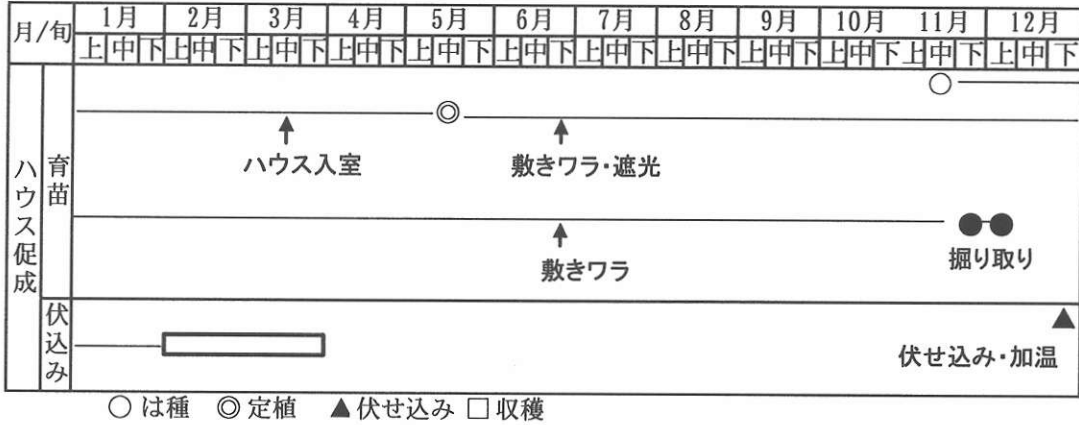


図1 栽培暦

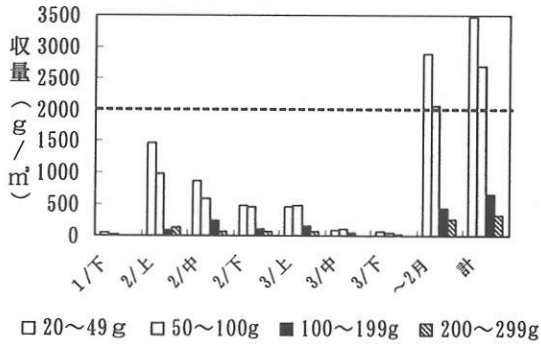


図2 根株重別収量 (2002年)

注) 根株重20～100gは養成2年株, 100g以上は株分け養成1年株を使用。

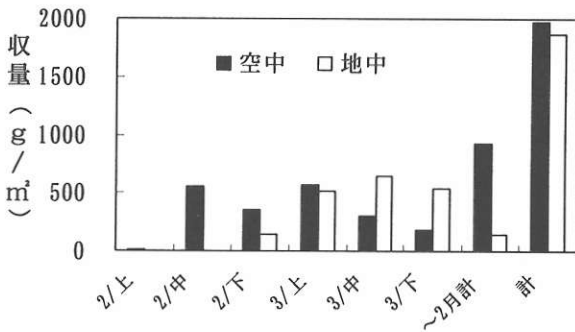


図4 栽培期間中の加温方法別収量推移 (2003年)

注) 養成3年株の根株重80～150gを供試。

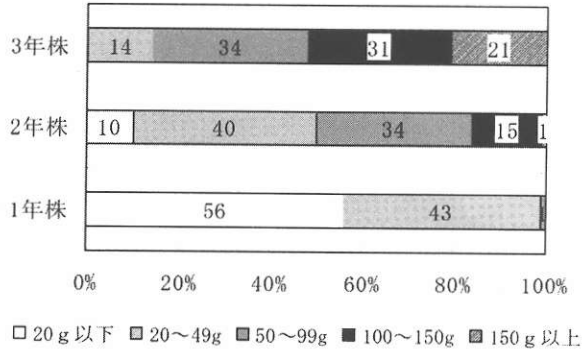


図3 養成年数別株根重分布 (2001～2003年)

注) 根株重は根長を20cmに調製後に計測。

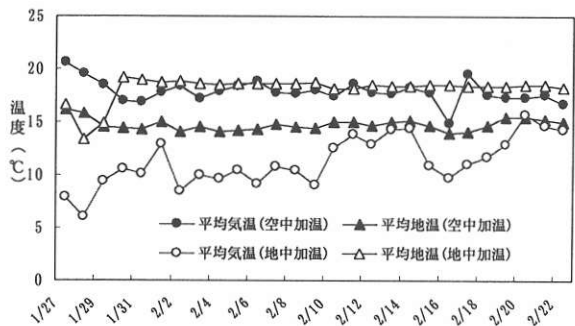
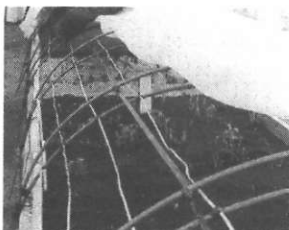


図5 加温方法の違いと気温・地温の推移 (2003年)



(写真1) 空中配線の様子

(写真2) 促成栽培でのイヌドウナ

